

## 第1回

# 千葉氏サミット議事録

## ●千葉氏郷土史トークセッション

テーマ「検証 全国各地の千葉氏文化」

### ■パネリスト

- ① 佐藤 育郎(一関市 いわて東山歴史文化振興会会長)
- ② 櫻井 伸孝(涌谷町 涌谷町文化財保護委員長)
- ③ 岡田 清一(相馬市 東北福祉大学教育学部教授)  
(史跡中村城保存管理計画策定委員会委員長)
- ④ 金子 徳彦(郡上市 大和町文化財保護協会副会長)
- ⑤ 岩松 要輔(小城市 小城郷土史研究会会長)
- ⑥ 土屋 清實(東庄町 東庄郷土史研究会顧問)
- ⑦ 遠山 成一(佐倉市・酒々井町 佐倉市文化財審議会副委員長)
- ⑧ 鈴木 佐(多古町・千葉市 千葉氏研究家・建長寺調査員)

### ■コーディネーター

- ・濱名 徳順(千葉氏顕彰会副会長)

■平成28年8月21日(日)

■三井ガーデンホテル千葉

○司会 会場の皆様、お待たせいたしました。ただいまから千葉氏郷土史トークセッションを開会させていただきます。

お時間の都合もございますので、ご登壇の皆様方のご紹介は、コーディネーターの千葉氏顕彰会副会長でいらっしゃいます濱名徳順先生にお願いをいたします。テーマは「検証 全国各地の千葉氏文化」です。濱名先生、よろしくお願ひいたします。(拍手)

○濱名徳順(千葉氏顕彰会副会長) それでは早速、トークセッションを始めていきたいと思います。座って話をさせていただくようにしたいと思います。

最初に、きょうの司会役を務めさせていただきます顕彰会副会長の濱名徳順と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。(拍手)

自分は美術史のほうが専門なのですがけれども、きょうは、こういう千葉氏の歴史の、また地方に展開しました文化の検証を、それぞれの地域の研究者の方においでいただきてお話をいただく、そのようなトークセッションの司会をさせていただくことと相なりました。全体の時間が80分ということで、大変短い時間でございますので、それぞれの発表は、まず5分間ずつ各自治体の研究者の方にお話を頂戴いたしまして、その後、残りの時間で2～3ディスカッションをしてみたいと考えております。先ほど司会者から各先生の紹介を私のほうからという話もございましたけれども、お話し申し上げましたように80分と大変短い時間でございますので、恐縮でございますけれども、それぞれの先生に自己紹介していただくということで進めてまいりたいと思います。

全体のテーマとしては「検証 全国各地の千葉氏文化」、千葉氏が各地に展開して、それぞれの地域でどのようなかかわりを持ったのか、また、どのような文化を展開していったのかということを検証していく、また、千葉県内で千葉氏がどのような歴史的な展開をしたのかということを検証していく、そのようなことをテーマにしていきたいと思ひます。

それでは最初に、県外の自治体から順番に発表いただきたいと思ひます。北からということで、一関市から順番にお話を頂戴したいと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。(拍手)

○佐藤育郎(一関市 いわて東山歴史文化振興会会長) 岩手県一関市から参りました佐藤でございます。岩手県、東北一帯に常胤公のご子息たち、千葉氏がどうして定着したか。『吾妻鏡』によりますと、文治5年(1189年)、頼朝、28万の大軍、藤原4代泰衡、17万の軍勢で迎え、第一戦、福島県の阿津賀志山で正面衝突するわけですが、あつという間

に平泉4代泰衡軍は敗れてしまう。その戦いのさなかに、常胤公の娘婿である葛西清重公は、平泉が滅んだとまだしっかり定まらないうちに奥州総奉行となったわけでございます。そして、年号変わって翌建久元年正月、千葉常胤公の子どもと伝わっております一関市の千葉氏が、頼朝公の旗本として東北に土着したわけでございます。以来、千葉氏は豊臣秀吉公の時代まで400年間、東北を統治したわけでございます。

平泉世界遺産、藤原3代は金色堂をはじめ金の文化を残しましたが、千葉氏は金の文化より地道な、農民、百姓、土地を思う一族でございました。千葉一族は、江戸時代の石禄に換算しますと、葛西・千葉一族ご一門で20万石を超えております。勝部一関市長が招かれて、ここにおりますが、現一関市は、その勘定からいきまして6万石に値します。先代伊達政宗公、日本の外様三大名の62万石の仙台藩ですが、3分の1に相当するのが千葉一族でございます。東北1,200年の歴史の中で、400年間東北を治めたというのは千葉一族でございます。江戸時代300年、それよりももっと長い間東北を治めた中で、今、宝となっているのは、農地開発というか、新田開発、農産物の振興、こういう目に見えない立派なものが今日の東北の文化を築いているということであると思います。

そういう中で、人物というものもございまして、北辰一刀流、千葉周作も名のとおり千葉一族、新渡戸稲造、それから仙台藩の今で言う東北大学の総長に当たる大槻氏、国語辞典を最初にあらわした文彦、和算家の胤秀など、数え切れないほどの人物が宝として輝いております。

最後になりますが、この千葉一族400年の東北の輝きを残そうと計らったのでございますが、唐梅館という館に初代千葉頼胤公が土着し、21代広胤公のとき唐梅館で秀吉対応の軍議を開いた。その軍議を再現したのが唐梅館絵巻というお祭りで15年間続いております。今では仙台から盛岡、その中間あたりの各市町村には唐梅館絵巻として知られるようになりました。どうぞ千葉の方々も東北にお越しいただいて、9月の最後の日曜日、唐梅館絵巻をご覧いただきたいと思います。

最後の一言でございますが、本日お招きいただいた一関市長も、父方、母方とも千葉氏系であります。現在の名字は勝部さんでございますが、千葉一族に相違ないことでございます。ご紹介申し上げます。ありがとうございます。(拍手)

○櫻井伸孝(涌谷町 涌谷町文化財保護委員長) それでは、宮城県涌谷町から参りましたが、武石三郎胤盛、三男の子孫ということで、我が涌谷町には亙理氏がおいででございます。亙理氏は、1190年、頼朝から今の宮城県の最南端、相馬市と隣接する陸奥国亙理郡

にも地頭職を得て、ここから出発したのでございます。

亙理氏は、本姓は武石姓でございましたけれども、鎌倉時代の末期に先ほど申し上げました亙理郡の知行地に下りまして、現地支配をするようになってから、武石姓を改めて亙理姓になりました。以来、豊臣秀吉の小田原征伐までの間、亙理郡におりましたけれども、秀吉の奥州仕置で伊達政宗が今の山形県米沢から大崎氏、あるいは葛西氏の旧領地に移りました際に、亙理氏も同時に現在の宮城県涌谷町のある陸奥国遠田郡へと転封をして、以後、現在に至っているという経過でございます。

1190年に亙理郡に地頭職を得て、1591年（天正19年）に現在の涌谷町に移封されるまで、ちょうど400年です。以後、涌谷で現在まで425年ほどになりますか、そういう意味で、亙理郡時代400年、宮城県涌谷へ来て400年という経過の中で、現在、私どもは亙理氏を顕彰しているという状況でございます。

なお、用意しました写真ですが、妙見宮でございます。こちらは元禄11年に、5代目の宗元が、元禄2年から同5年の日光東照宮の修復に従事した涌谷の棟梁が建てた社殿でございます。そういうことで、現在、宮城県の有形文化財になっております。この妙見宮を中心にして、涌谷亙理氏の氏神様ということで、毎年9月9日にお祭りを行っている状況でございます。

それから、この獅子舞でございますけれども、戦国時代に京都から伝えた獅子舞を妙見宮に奉納するという行事でございます。なお、奥に見える建物は光明院というお寺ですが、こちらは最初に申し上げました武石胤盛の位牌寺になっておりまして、亙理から涌谷へ亙理氏と一緒に移ってきたところで、私どもとしては、妙見宮といい、この光明院、もしくは本尊の阿弥陀如来など、武石氏由来の文化財を顕彰し、お守りしているという状況になっております。時間でございますので交代します。（拍手）

○岡田清一（相馬市 東北福祉大学教育学部教授） 続いて、相馬市のことについてお話をさせていただきたいと思っております。現在、相馬市では、中村城という県の史跡がございますけれども、その整備に向けて動き始めております。私は、その見直しの検討委員長とか、あるいは南相馬市の市史編さん、文化財保護といったような仕事をしております。きょう、南相馬市の二上さんとおっしゃる野馬追に関する先達が急遽来られなくなったということで、あわせて私のほうで、まとめてということも僭越なのですけれども、お話しさせていただければと思っております。

ページがないのでわかりにくいのですが、「相馬市資料」という中で「相馬野馬追いと

妙見信仰」というレジュメをつくっておきましたので、ご覧いただきたいと思います。先ほどの野口実先生の資料の中にも千葉氏の系図が書いてあり、次男師常が相馬郡を支配したということをちょっと話されましたけれども、それと同じような系図が相馬氏にも残っております。これは江戸時代の寛永20年につくられたということがはっきりわかっているもので、福島県の文化財に指定されているのですけれども、野口先生が提示された系図と大きな違いは何かというと、将門の子孫ということが非常に強く意識立てられています。千葉氏サミットでは申しわけないのですが、地元では、千葉氏の子孫という意識はあまりないのです。将門の子孫という意識が非常に強いのですね。

ただ、先ほど言いました相馬に残っている系図、これは地元の歓喜寺というお寺に残されているものですが、それを見ると、レジュメの一番上にも書いておきましたが、このような系図が載っております。罫線が少しずれてしまっていて申しわけありません。私の送ったデータが少しずれていたようですが、これを見ると、将門の子孫がずつといて、その子孫が相馬氏だと。ところが、系図の右側のほうに師国という人がいるのですが、子どもがいなかったために、千葉常胤の次男の師常を養子に迎えたという系図が残っているわけです。実は、将門の子孫の相馬氏と、良文、忠頼の子孫の千葉氏との関係というのは、それよりもさかのぼるのだと。それはどういうことかということ、千葉氏の先祖に当たる忠頼という人が将門の養子になった。だから、千葉と相馬というのは、二重にわたって一族なのだという意識が系図の上ではっきり出ているわけです。

それのもとになったのが、2番目に挙げておいた『源平闘諍録』という史料なのですが、恐らく14世紀の前半には既に成立したと思われるわけです。そこに、将門が妙見のご利益を得て非常に大きな力を持つことができたけれども、あまりにも粗暴な振る舞いが多かったために妙見が将門から離れて、良文のもとに去って行ってしまった。ところが、ゴシックにもあるのですが、良文というのは将門にとって伯父なのだけれども、甥の将門の養子になったといったような伝承が残っているわけです。恐らくこういったものが江戸時代につくられた系図にもあらわれているのではないかと思います。

ですので、相馬野馬追という非常に知られた民俗行事が毎年行われておりますけれども、それも妙見信仰に対する祭礼である。妙見信仰にささげる行事だという意識が非常に強い。そういう意味では、千葉氏文化の一端と言えなくもないのかなという気はいたします。

この相馬氏は、下総国相馬郡、そこに書いてあるように現在の柏とか我孫子とか取手、

私は取手の出身なので、実は私が相馬の本家だと言っているのですが、地元では誰も信用してくれません。そういったところの相馬郡が相馬御厨というものになって、そこを師常が支配して相馬氏を名乗るということになるわけです。この相馬の師常の子孫が、鎌倉時代の末期に、頼朝から拝領した行方郡という地頭職を手づるに向こうに移住するわけです。この行方郡というのは、現在の南相馬市に当たります。南相馬市の南に小高というところがあるのですけれども、今回の震災で小高区という地名がマスコミでかなり出てきているのですが、そこを本拠にして、その後、現在の相馬市に移住する。これは余談ですが、小高から現在の相馬市、当時、中村といいましたけれども、移ったのが1611年で、それからちょうど400年したときに5年前の大震災が起きている。区切りがいいという言い方は非常に申しわけないのですが、そういう状況でありました。

ただ、相馬郡にも残った相馬氏がおりますけれども、小田原北条氏が滅びた1590年に散り散りになってしまっていて、一部は江戸幕府の旗本になったり、あるいは小田原の大久保家に仕えたり、彦根の井伊さんの家臣になった。井伊直弼が暗殺されたときに、その首を持って帰ったのが相馬という家来だったという話がありますが、そのようにして向こうに移っております。

したがって、移った当時は行方郡、その後、移ったとき、現在の相馬市は、当時、宇多郡といいました。この宇多郡と行方郡が合併して相馬郡ができるのが明治29年のことで、近代になってからのことです。ですから、それまでは向こうに相馬という地名はなかったわけです。こちらの相馬を支配した相馬氏が向こうに移住して、その支配した土地が相馬郡になったという経過をたどっているわけです。

野馬追は、相馬の中村藩の史料の中に残っているのですが、最も古いもので1597年の史料があります。戦国時代末というか、近世の初頭と言っているか、非常に微妙なところですけれども、そこで野馬追とか野馬掛が行われたといったような史料がありまして、かなり古い時代から行われていたということがわかります。先ほども言いましたように、これは妙見に対する奉納であるということと、馬術の訓練を兼ねている。それが基本です。

今、3日間にわたって行われていますけれども、2日目に南相馬市で行われる神旗争奪戦というものがあるのですが、そのときに打ち上げられる神旗は、野馬追を奉納する妙見神、これは3社あるのです。現在の相馬市に残っている相馬中村神社、南相馬市にある相馬太田神社、もう1つは小高区というところにある相馬小高神社、これはいずれも妙見の神様を祭っております、この3社の旗が打ち上げられて、それを騎馬に乗った武者風の

人たちが取るということをしております。

例年、7月の下旬に行われているのですが、震災があつて皆さん避難をされて、どうにもならなくなったのですけれども、それでも、わずか80騎ほどだったでしょうか、集まって、きちんとした形ではできなかったのですが、行っております。それだけこの地域にとって野馬追というのは、地域の人たちを結びつける非常に重要な要素をなしていると同時に、その後だんだん増えまして、今年は480騎ほどになっています。これもまたあの地域の特徴なのでしょうけれども、江戸時代の藩主、相馬家があるわけですが、その相馬家のご子孫の方を総大将という形で招いて行っている。時々いらっしゃれないときもあるので、今年も当主の次男に当たる陽胤さんという方が総大将を務められるというふうに、藩主家と地域の方々との結びつきが今でもずっと強く維持されている。そういう意味では非常に特異な地域なのかなという気がいたします。

資料の下のほうには野馬追と妙見に関する史料を挙げておきましたけれども、先ほど言ったように、史料的には相馬と千葉というのは同類であるとか、一体性を保つような史料は幾らでもあるわけですね。4)の『奥相志』という史料があるのですけれども、これは江戸時代からつくられた相馬藩領の地誌なのですが、最終的には明治4年くらいに成立しているのです。それでも妙見神社というのがあつて、それが「当社は千葉・相馬累世の鎮守なり」といったように、千葉と相馬が非常に一体化したものなのだという意識が文献の上ではあります。ただ、現在それを執行している方々の意識の上にちょっとその辺が弱まっていて、将門、将門、将門ということになっているのが現状なのかなという気がいたします。

なお、現在行われている神旗争奪戦というのは、もともと藩が行っていたものですから、廃藩置県によって藩がなくなると一旦途絶するのですけれども、先ほど言った太田神社が中心になって、中村、小高の3社が一緒になって再開しております。江戸時代には野間土手というのがつくられておまして、例えば千葉県の鎌ヶ谷とか、南柏の駅の近くとか、流山に今でも8代将軍吉宗のときにつくられた野間土手というのが残っていると思うんですけれども、そういうものの影響を受けて相馬のほうでもつくられて、現在の南相馬市の原町区というところがほぼすっぽり入るくらいの広い範囲で野間土手がつくられていたと言われています。そこで野生の馬を放牧していて、それを小高神社まで引き連れて、そこで野生の馬を捕まえて小高神社に奉納する。これがもともとの野馬追で、今はマスコミの影響で神旗争奪戦が非常に目立っているのですけれども、あれは比較的新しい。比較

的といっても明治になってからの行事になるのかなという気がいたします。いずれにしても、非常に地域の人たちの結びつきのある行事だなという気がいたします。ちょっと長くなりまして失礼しました。(拍手)

○金子徳彦(郡上市 大和町文化財保護協会副会長) 続きまして、岐阜県郡上市からやってまいりました金子と申します。どうぞよろしく願いいたします。ここに座って気がついたのですけれども、ちょっと後ろを見てください。郡上市からバスを1台仕立てまして仲間が駆けつけてくれまして、オリンピックの応援団のように張り紙をしてくれました。どうもありがとうございます。しっかり務めたいと思います。

パワーポイントをお願いします。郡上東氏というのは代々和歌に優れ、さらに漢詩文、五山文学なのですけれども、そういう文学に秀でたという、千葉氏の中でも非常に特異な一族だと考えております。

ちょっと細かいのですけれども、どういう一族かと申しますと、先ほどからこの系図が出ております。千葉常胤の次男が今紹介のありました相馬氏、師常。東氏は六男胤頼という人から始まります。この東氏というのは下総東氏ですので、後で土屋先生からご紹介があるかと思えます。この東氏の3代目、東胤行が郡上の初代当主に当たります。承久の乱の戦功で郡上に加領、領地を新しく加えられた。そして郡上に住むわけのですけれども、どちらかというとな家が郡上に来たという形で発展しております。なぜ郡上だったかと申しますと、先ほど野口先生から少し紹介がありましたが、初代の胤頼が上西門院に仕えていたということも関係しているのではないかと。山田庄というのは上西門院の荘園だったとされておりますので、そういうことがあろうかと思えます。

この東氏ですけれども、今言いましたように代々和歌に優れているというのは、2代目の重胤が源実朝に側近として仕えておりまして、よき歌友であったとされております。それから、胤行の奥さんは定家の孫娘だとされております。これはもっときちんと検証しなければならないのですけれども、代々そのように言われている。そういう血縁があって和歌の一族になった。胤行から8代氏数までの人たち、全部で9人になりますけれども、全部で72首の歌が勅撰和歌集に入選するという歌の一族です。

さらに、常縁のお父さんの東益之と常縁の周辺は、非常に難しい名前の人たちが並んでおりますけれども、これは全部五山文学僧なのです。京都の建仁寺とか南禅寺に上って住職まで務めた人たちです。当時、南禅寺とか建仁寺の住職というのは、今で言うなら東大とか京大の学長クラスだという言い方もされますが、そういう非常に文学に優れた一族で

した。

東氏というのは、11代目のときに郡上八幡に移って、それから郡上八幡のまちを開いていくわけですが、八幡に移ってからは遠藤氏に代わっていきます。

この人が東常縁です。古今伝授の祖と言われております。古今伝授というのは『古今和歌集』の伝授のことですけれども、『古今和歌集』は和歌の規範だということで、古典の集大成だとされます。

これは篠脇城といいますが、東氏は230年間ここに拠点を構えております。さらに、最初は阿千葉城という城を構えるのですけれども、阿千葉というのは、千葉から来たからそんな名前がついているのですね。郡上八幡に移って遠藤氏の代も数えると、全部で470年間郡上を治めていた一族です。

妙見さんも勧請しておりまして、そこで行われております七日祭りという例祭がございます。これは中世の芸能である田楽が入り込んでおります。まさに典型的な中世の一族であるということがわかろうかと思えます。

このように、郡上東氏は千葉の流れを汲んでいろいろなものがございまして、これからいろんな展開が図られるのですけれども、本日、もう少し時間をいただいたそうですので、ご紹介を後に送りたいと思えます。どうも失礼いたしました。(拍手)

○岩松要輔(小城市 小城郷土史研究会会長) 私は佐賀県小城市から参りました。佐賀県は九州にございます。千葉氏が九州にまで勢力を伸ばしていたという証拠でございます。きょうは早朝から、江里口市長をはじめとして、私どもの郷土史研究会や商工会議所の村岡会頭も来ておりまして、十数名こちらのほうに参っております。

私からご報告したいと思うことは、レジュメの5番目に「小城市資料」というのが載っております。そこを開いていただきたいと思えます。その次のページが「肥前千葉氏と小城」という私が設けた項目でございます。その1番目に「小城祇園山挽き700年記念行事」と書いております。これは先月の7月23・24日、土日に祇園山挽きがございました。これが700年になる。何が700年かといいますと、千葉胤貞という人物が小城のほうに祇園社を招来した。そして山挽きを始めたということが史書に載っているわけでございます。その史書を根拠として700年ということで、これまでになくたくさんの人を集めて、たくさんさんの組織で行ってきたところでございます。

そのほかにも、小城には千葉氏が招来したところの日蓮宗がございまして、松尾山光勝寺と申しまして、やっぱり千葉胤貞が招来しております。九州で初めての日蓮宗の寺でござ

います。この寺は千葉の中山法華経寺から伝えられたものでございます。

そのほかに妙見信仰が伝わっております。九州では、大宰府に天神さんがございますけれども、天神さん信仰がございまして、それに劣らないような形で妙見信仰の祠が小城一帯にございます。そのように、千葉氏が小城一帯に精神的な影響を与えたという事柄がございまして。

それでは、何で千葉氏が肥前国小城郡のほうにやってくるのかといいますと、(2)の①です。千葉常胤公が源平の合戦で功績を上げられまして、肥前の小城のみならず、薩摩国のほうの支配もなさっております。ほかにも数カ所ございますけれども、小城のほうでは小城郡の惣地頭職という立場で領地があてがわれております。これは地頭職の領地というのがございまして、そういう形で小城のほうに入っておられます。

それまで小城には代官が来ていたようでございますが、②のように、元寇のときに千葉氏の本家が小城のほうにやってきました。これは防衛のために、九州に領地を持っている御家人は下らなくてはならない。防衛の任務につくということで、千葉の本家の頼胤が文永の役、宗胤は弘安の役のときに対応しております。実際に小城に来ておられます。

先ほど祇園信仰とか日蓮宗のことを申し上げましたけれども、宗胤の後になります千葉胤貞、胤泰という人たちが鎌倉末期から南北朝の最初のときに小城に来ておまして、胤泰は小城に土着を始めております。惣地頭職という力しかないのに、その後、なぜか小城が肥前国の中心の土地になり、その領主として千葉氏が君臨することになるのです。守護でもないのに、なぜそのようなことになったかという、神社の力を使った支配を広げたと言われております。

一番盛んなときが15世紀、1400年代の中ごろでございまして、千葉胤鎮、元胤という親子が出ます。このときは千葉城を中心に小城町というのができて、勢力を広げたのですけれども、肥前国における小城の千葉というのは朝鮮にまで名前が通っております。それが『海東諸国紀』という本に書いてあるということでございます。

この千葉氏の配下の中から龍造寺氏、鍋島氏が出ております。幕末に鍋島と黒田が交互に長崎の警備をしますけれども、1800年をちょっと超えたところにフェートン号事件が起こりますが、そのときに鍋島藩は面目を失するわけです。その責任を負って切腹した2人の隊長の1人が千葉氏だったのです。鍋島氏の配下になっております。

明治維新を迎えまして、江藤新平という著名な人が出ます。佐賀の乱で亡くなりますけれども、この人が千葉胤雄という名前で、千葉氏の子孫だということを誇らしげに書類に

書いております。こういうふうな千葉、鍋島の歴史を基本にしながら、小城は新しいまちづくりに今入っているところでございます。以上でございます。(拍手)

○濱名徳順 県外からおいでいただきました各先生からそれぞれご発表いただきまして、それを受けまして、これから県内の先生にお話をいただきたいと思っております。最初は、東庄の土屋先生からお願いしたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

○土屋清實(東庄町 東庄郷土史研究会顧問) 県下東庄町の土屋清實です。別添「東氏の活躍――雄姿そして優雅――」は後でご覧いただきたいと思っております。

さっき金子さんがお話しになりましたように、3代胤行が郡上へ移ると、胤行の長男、これが下総東氏です。ところが、この人は茨城県の鹿島神宮の宮司さんの系統になります。ちょっと東庄が寂しくなりますけどね。東庄といいますと、現在の東庄町、その近隣から銚子市までが所領です。そのうちに、1221年の乱が起きてから200年あまりたつて、千葉氏に内紛が起きます。千葉宗家、傍系の馬加(まくわり)、私は最初、失礼ですけども、「ばか」だと思ったのですよ。「まくわり」というのだそうです。場所は千葉市の今の幕張ですね。政権は足利氏で、幕命を受けて11代の常縁が郡上から来ます。縁数、浜春利、そういった人たちを連れて、つわものが来ます。まさに遠征ですよ。それで馬加城を落とします。城主は上総の八幡というところで敗死します。

その後ですが、豊臣秀吉が1590年に小田原城を攻略します。関東の一円の侍たちは、全部小田原の後北条の配下ですよ。千葉氏の宗家はまだ若くて、東氏のたしか17代の方が千葉連合軍の総大将になって行きます。ところが、彼は残念ながら討ち死にですよ。そうすると、東氏が絶えてしまうと思ったのですが、そこはありがたいですよ。千葉宗家になる胤富の子ども、宗胤といいます。この人が千葉氏から東氏を継がせてくれます。ですから、その東氏が郡上へ行ったり、また山形のほうへ行ったり、江戸へ行ったりして、最後は東氏の発祥の地、東庄町へ来てくれますよ。30代の東保胤さんとおっしゃる方が近年に亡くなりました。ところが、その人の甥御さんが近くの八日市場市に住んでおられます。この方が31代ですね。

それから、去年5月24日、鈴木佐さんのご案内で東たか子さんがおいでになりました。東庄町の千葉氏、東氏の文化財をご覧になった後、東氏初代の胤頼夫妻のお墓のご案内しまして、そこに参詣されました。たか子さんは非常に明るい方で、私は時には遠藤と言っております。これはDNAで、間違いなく郡上の遠藤ですね。東氏です。ですから、東氏は全部で3系統あります。ちょっと長くなりました。失礼しました。(拍手)

○遠山成一（佐倉市・酒々井町 佐倉市文化財審議会副委員長） 続きまして、佐倉市・酒々井町を代表させていただきまして、お話をさせていただきます。遠山と申します。よろしくお願ひします。

私は、戦国時代、下総千葉氏の中心地となった本佐倉城について、時間もございませんので、ごく簡単に紹介させていただきます。なお、映像のほうは、後ほど首長フォーラムで、酒々井町さんのほうでご用意してくださっているようですので、そちらをご覧ください。

さて、本佐倉城というのは酒々井町と佐倉市のちょうど境目でございます。いつごろできたかといいますと、はっきりした年はわからないのですが、おおよそ文明年間、時代にしますと1469年から1486年の間ではないかと。近世に成立した記録によりますと、文明15年（1483年）という年が出ております。大体このくらいでよろしいのかなと思います。先ほどから各パネラーの方からご紹介されています妙見社が、実は現在も本佐倉城の根古谷の部分でございますけれども、もともとは第Ⅱ郭、通称奥ノ山というところに、土壇、土を固めた土台のようなものが見つかっておりまして、恐らくこの第Ⅱ郭に妙見社があったのではないかと。やはり千葉氏というと妙見ということで、先ほどから各パネラーの方のお話を感慨深く伺っておりました。

さて、本佐倉城ですけれども、本来、千葉氏の本拠はもちろん千葉市のほうにあったわけですが、享徳の乱という1455年から始まる関東を巻き込む大きな戦乱の中で、千葉宗家の交代がございました。最終的には、印東荘、現在の佐倉市、酒々井町、富里町、さらには成田市の西部にかかるところにあった荘園に基盤を持っていた千葉の一族が、結局、宗家を継ぐことになりまして、その本拠地として選ばれたわけです。

本佐倉城がなぜここにつくられたかということは、地理的な要因から考えますと、まず陸上交通、それから先ほどからもお話に出てきておりますが、現在の印旛沼は香取の海という大きな内海の一歩奥の入り江に当たる部分だったということで、水上交通が活発でした。ということで、水上交通と陸上交通の接点をにらんでつくられたと考えたいと思います。

それから、私が重視していますのは陸上交通なのですけれども、実は東下総、現在の銚子とか旭市のほうから八日市場、多古、酒々井、臼井、八千代、船橋を経て江戸に至る道がございました。私は下総道と呼んでいるのですけれども、この下総道の要衝に位置していたわけです。今、国道296号というのは、佐倉市の臼井から江原というところ、佐倉城

の下を通過して酒々井のほうに行っているのですけれども、初期の段階では、下総道が鹿島川を渡ることができずに、臼井から四街道のほうへ南下し、そこから鹿島川を渡って、大篠塚というところなのですけれども、そこから本佐倉のほうへ行っていたと考えられています。恐らく戦国の終わりごろになりますと、現在の鹿島橋がかかっております、歴博さんのちょうど下ですけれども、その交通が可能になったということで、臼井から四街道、佐倉市の南部のほうを大きく迂回していた道が、真つすぐ酒々井のほうへ行くことができるようになったと考えております。その証拠として、現在の佐倉城、近世佐倉城ですが、この前身の中世のお城が見つかっております。鹿島城といいます。これは歴博さんをつくる時に発掘して、中世の鹿島城の一部が出ているのですけれども、このことは何を意味しているかという、交通路が付け替わったことで、鹿島川を渡る要の部分を押さえるということで恐らく鹿島城がつくられた。さらに、千葉氏が滅びた後に、結局、土井利勝がその場所に近世の佐倉城を築くことになった、そういうことではないかと私は考えております。以上、簡単ですけれども、本佐倉城の位置づけをお話ししました。(拍手)

○鈴木 佐(多古町・千葉市 千葉氏研究家・建長寺調査員) パワーポイントをお願いします。

私は千葉市と多古町を担当します鈴木佐と申します。一応自己紹介させていただきます。私がなぜここに選ばれたかといいますと、昭和60年、高校生のときから郡上、小城、相馬、涌谷と民間交流を続けた者でございます。そして社会人になって、一関の皆さんとも交流させてもらっています。そういった事情で今回登壇させてもらっております。

さて、多古町から入ります。先ほど野口先生のお話からも千田荘という名前が出たと思います。今、千田という名前はないのですが、千田荘は多古町、匝瑳市、今、香取市に編入されている栗源町が一部入って、千田荘といいました。まさしくその中心が多古町でございました。その特徴を申し上げますと、多古町を訪問するなら6月、アジサイの時期です。栗山川、これから出てくる日本寺というところはアジサイがきれいです。ぜひ、そのときに来ていただくといいのかなと思います。

さて、千田荘の中心になるのが栗山川です。栗山川の水運というのは非常に重要なものがございました。それがまず1点。

その次に、千田荘というのは、今でもそうですけれども、日蓮宗寺院が大変多い町でございます。特に、今話した日本寺、中村壇林というものがあって、さらに志摩城という、千葉一族が滅亡する1つのお城ですけれども、そこには日蓮宗でも不受不施派という大変

珍しい地区がございます。そういった町でもあります。

もう1つ、やはり千葉一族の町です。東禅寺というお寺があるのですが、先ほど室町期の享徳の乱のお話をされましたが、そこに千葉胤直のお墓がある。これがまず1点。もう1つ、右側の写真の高根権現社という社がある。これは戦国時代の千葉一族、牛尾胤仲を祭る神社です。戦国史を研究する外山信司先生から教わったのですが、江戸時代、松平家は何度も千葉家の社をつぶそうとした。しかし、それを多古の人たちがまた復興したという特徴がある町でもあります。

先ほど出ました千田荘というのは、千葉家でも中枢部隊のいたところでございますけれども、皆さん、お帰りになったら必ず多古町の地図を見てください。きょう地図を出せなかったのですが、先ほど野口先生のお話がありましたが、栗山川一帯の地名がそのまま武士の姓になっているというのがあります。肥前国に行ったのは先ほどの千葉胤貞でございますけれども、その精鋭部隊を調べると、『徳島本千葉系図』を見ますと、おもしろいことに原、飯篠、次浦、井戸山、岩部、牛尾、これは実は多古町にある地名なのです。これがそのまま九州の肥前に行っているということです。圓城寺というのは多古ではないのですが、これも実際肥前に行っています。だから、多古の千田荘の方が行っているわけです。

その中でも特に活躍するのが、ここに書いていませんけれども、ご存じだと思いますが、龍造寺隆信の四天王に円城寺信胤というのがいる。そのほかに飯篠というのが、江戸時代、長崎の大村藩に仕えます。その中で、千葉ト枕という大村藩の財政を復興させた人がいます。そして、先ほど岩松先生がお話しした江藤新平胤雄の先祖を見ると、何と岩部という地名があります。これは多古の上にある栗源町の岩部というところが先祖だと書かれております。千田荘はそういうものがあります。

その次に、日本寺というお寺があるのですが、中村壇林といひまして、重要なのは、日本寺が正東山。中山の法華経寺が正中山、中山の由来です。そして、先ほども言った小城の松尾山が松尾山光勝寺という名前になって正西山。つまり、日蓮宗系のお寺が胤貞と日祐上人によってつくられる。こういったお寺が残っている。ですから、千葉一族が一緒になってつくっていったのが千田荘でございます。

千田荘は、もう1つ大事なところがあります。今は本当に農村地帯ですが、昔はすごい文教都市でございました。その1つが東禅寺です。今は檀家数が少ないのですが、大変立派なお寺でございます。鎌倉幕府の二本柱、律宗と禅宗の律宗寺院が東禅寺

です。律宗というと鎌倉の極楽寺、あと神奈川の金沢文庫称名寺も律宗です。律宗とつながっていたのが東禅寺です。多古から金沢文庫のほうに行くというお坊さんの流れもあります。ですから、今残っていたら足利学校に近いお寺でございます。その東禅寺は、享徳の大乱で千葉胤直が自害したところでございます。

次は千葉市です。これは時間がないので本当にはしょってしまうのですが、もともと千葉家の前は房総平氏、両総平氏と言っていました。千葉氏の本拠は、大椎に館がありまして、その後、1126年（大治元年）6月2日、文献的に難しいところがあるのですが、千葉開府の日であって、平常重が千葉に館を構えた。先ほどお話がありましたけれども、館の説はいろいろあって、まだ定まってはいません。千葉家は平安末期から室町中期まで千葉が館でございました。その後、佐倉のほうに行っています。最近の説ですと、戦国期、千葉昌胤など、妙見様が千葉神社にあったのですが、高篠を宿所にしたというのがあります。

千葉市内にはたくさんの千葉家の遺跡があります。説明ができないのですが、妙見本宮千葉神社、かつては北斗山金剛授寺と言いました。そのほかに、その近くには来迎寺さんや大日寺さん、宗胤寺さんもございました。はしょってすいません。

やっぱり花見川区が大事です。今回、涌谷町の方がお見えになっていますけれども、涌谷町の発祥は千葉市花見川区の武石です。皆さん、「たけいし」と呼んでいますけれども、「たけし」が正しいです。そこに行きますと、これは本当に貴重なのですが、昭和60年代に出した浪切不動です。ここは武石胤盛の居城があったところで、その台地へ行きますと武石神社がございまして。その後ろのちょっと東京寄りに行くと、馬加城と言いまして、享徳の大乱で千葉胤直を討った馬加の遺跡なども残っております。

最後に、皆さんに聞いてほしいのは江戸時代の千葉です。これはすごく重要なのです。江戸時代の千葉は、ここに書いてあるように、千葉家が滅んだ後、妙見寺の門前町であり、佐倉の堀田家のまちですけれども、江戸時代、全国の千葉一族が千葉に来ていたのです。その1つが涌谷伊達家です。涌谷伊達家の妙見宮縁起を見ますと、亙理元宗・重宗・定宗という伊達政宗を支えた武士たちが、妙見寺、あとは海隣寺と書いていました。佐倉の海隣寺に来ていたという記録が出ています。さらに、涌谷の見龍寺の本尊は、何と千葉で求めた如意輪観音がそのまま本尊になっているということがわかっています。

福島の相馬藩も忘れてはおりません。当時、北斗山金剛授寺は妙見寺と言いました。その妙見寺に年始代参をしていたのが相馬氏です。さらに、相馬氏は、先ほど岡田先生が言

いましたように、取手のほうにも領地がありました。取手に海禅寺という相馬家と将門由来の菩提寺があるのですが、そこにも代参しているということがわかっている。さらに、将門の末裔であると同時に、平良文の末裔ということで、平良文を祭る夕顔観音がある。その観音を、江戸時代、相馬家がわざわざ勧請しているということがわかりました。そういったこともあります。

さらに、岐阜県の郡上八幡の遠藤家です。この遠藤家も、享徳の乱のときに、わざわざ東常縁が千葉に来ております。その関係で下総と美濃につながりがありました。今、東庄町に東大社という神社があります。そこの禰宜家に、初代郡上藩で、山内一豊の妻のお兄さんと言われる遠藤慶隆の寄進状の写しが残っている。さらに、郡上八幡の遠藤家も年始代参しておりまして、東大社にも東氏の方々が来ているということがわかっています。

そういったことで、江戸時代というのは、確かに千葉は滅びました。ただ、1つ言いたいのは、全国の大名家になった千葉家、それ以外に、例えば水戸藩に仕えた千葉家なんかも、みんなこの千葉に来て証を訪ねています。何を言いたいかといいますと、本日のサミットの前に、江戸時代に全国の千葉一族がこの千葉に来ていただいたということが残っています。そして、今この日に全国各地から千葉ゆかりの方が来まして、新たな交流が始まろうとしていることがわかっております。以上でございます。(拍手)

○濱名徳順 各先生、ありがとうございます。全く時間がなくて、急ぎ足でご発表いただきましたけれども、これから今までの発表を踏まえまして若干のディスカッションに移っていきたいと思っております。

先ほど野口先生のお話の中に、千葉というと知的な印象が少ない、全国でそのような見方もされているということがございましたけれども、今、千葉市としては、千葉一族の歴史をまちづくりの1つの核として新たな文化をつくり出していきたい、そのような意図をお持ちであるということをお聞きしております。県外の各地域で、千葉一族が生み出した歴史遺産を核としながらまちづくりを展開している地域がございますので、そのところをまた少しお話をしていただきながら、ディスカッションを進めていきたいと思うんですけれども、まず最初に郡上市です。一度東氏の文化がほとんど忘れ去られたような状況となっていた中で、新たにそちらにスポットライトを当てて文化施設を設立しながら、現在でもさまざまな活動が展開されている。実際その活動、そういった運動の中心になられたのが金子さんでございますので、金子さんから、一度忘れ去られたものをよみがえらせていった、その辺の経緯などもお話しいただければと思います。よろしくお願いいたしま

す。

○金子徳彦 パワーポイントをお願いします。

きっかけは、ご覧いただきますように、先ほど見ていただいた篠脇城の麓に東氏のお屋敷の跡が見つかりまして、発掘調査をしたら、左手のほうの写真ですが、庭園がほとんど原型のまま出てきたのです。文化庁の調査官が来られて、大変すばらしいということで、国の名勝の指定を受けることになるわけです。それを整備したのが右手の写真になるのですが、当時、岐阜県では、国の名勝というのは2カ所しかありませんでした。ここは3カ所目の名勝ですし、郡上大和というところは大きな特徴もないまちでしたので、大変なお宝が出てきたと喜んだわけです。皆さん方の感覚からいえば、郡上は踊りがあるではないか、水のまちがあるではないかとお思いでしょうけれども、それは隣の、まだ合併前ですが、郡上八幡の話でありまして、郡上大和というところは、当時、緑と清流の里なんて言っていた、どこにでもありそうなところで、これを地域資源として、まちづくりに生かそうではないかという発想が生まれたわけです。時代的にも、ちょうどそのころはふるさと創生という事業があったのを覚えておいででしょうか。マスコミに取り上げられたのは、金の延べ棒を買って人を集めようとかいったようなことばかりでしたけれども、我々は結構まじめにこのことを追求して、東氏の文化とその歴史でまちおこしをしようと考えたわけです。

最初に、「くるす桜」という薪能を始めました。これは別名「常縁」という能ですがけれども、能の原曲だけが残っていたのですね。それを、そのままでは能にならないということで新しく作り直して、明建神社の拝殿を能舞台にして始めたわけです。これは東常縁を顕彰する能ですがけれども、大変な評判を呼びまして、これに自信を得た当時の大和町では、古今伝授の里づくりということをシンボル事業として、まちづくりを始めてきました。

その拠点になったのが、古今伝授の里フィールドミュージアムという施設です。私はここに退職するまで20年以上勤めていたわけですがけれども、大変すばらしい施設ができて、ここでいろんな展開をしていく。展示計画などもしていったわけですがけれども、何といても周りの景観が非常にすばらしいのです。

これは明建神社の桜並木とか対岸のぼたん園、左手に見えているのはレストランなのですがけれども、フレンチのレストランが大変評判を呼びました。雪景色も大変美しいのですがけれども。こうしたミュージアムができて、その後、温泉を掘りまして温泉施設がで

きたり、また道の駅が大変評判になったりということで、それらを全て第三セクターの会社が担っていくという形で大和が発展していったわけです。今では古今伝授の里・大和というのは周辺から完全な認知を受けているという状態です。

やってきたことですが、先ほど野口先生の講演の中で、最後に真の地域振興とはということを出されましたね。これをもう一度読んでみますので、かみしめていただきたいと思います。「そこに住む人々がその地域の歴史や伝統を知る事によって、ここに住んでよかったと心の底から思えるような『まち』を自分たちの手で作っていくこと。経済効果の前提として、人々が、自らの暮らす地域に対する誇りや、経済的利潤では購えない充足感、いわば『心の福祉』のようなものが、まず実現されるべき」ということでまとめられたのですけれども、まさにそういうことを地道につくり上げてきて、まだ十分ではないけれども、そういった手がかりができたのではないかなと自負しております。

○濱名徳順 ありがとうございます。突っ込みを入れたいところではあったのですけれども、各先生方の発表が少しずつ延びておりまして、あと10分で切れと今言われてしまったものですからね。現在のフィールドミュージアムの入館者というのはどのぐらいでございますか。

○金子徳彦 有料で入館している人数はずっと下がってしまって、今のところ5,000～6,000なのですけれども、入館しないで来ている人は2～3万人はあります。ただ、人数のレベルではなくて、その施設が持っている地域に及ぼすインパクトはもっと大きなものだと考えております。

○濱名徳順 和歌のセミナーみたいなことが盛んに行われているような話も聞いたことがあるのですけれども。

○金子徳彦 そうですね。私の跡を継いでくれた人間が、そういうことが得意で、いろんなことを企画してくれます。連歌なんかも再興してやっております。

○濱名徳順 もう一事例、岩松先生、小城の取り組みはいかがでございましょうか。

○岩松要輔 先ほどのレジュメの5番の「肥前千葉氏と小城」の(3)がそれでございますが、まだ郡上市のような具体的につくり上げられてきている形ではございません。ただ、千葉氏が小城を支配し、肥前国全体を支配しようとした、それから鍋島家の分家が小城にやってきて支配した、その根拠地が、中世のものは中世のものでそのまま残っております。それから、近世の鍋島氏の城下は南のほうに残っております。それが市の教育委員会の力で発掘されて、具体的に事物が出てきております。そういうものを市民に表示して、

現在のところは私どもの郷土史研究会、それから野口先生にも何回も来ていただいているのですけれども、肥前千葉氏調査研究会、佐賀大学の先生とか、亡くなられた石井進先生にも来ていただいて、お話を受けております。

そういう専門的なことを進めると同時に、先ほどのような具体的に千葉氏が支配していたころの屋敷跡から出てきたもの、または小城町という庶民の住んでいるところから出てきたものを目の前に見ることによって、この小城というところの特色を知って、4番目になりますけれども、まちおこしに歴史的背景を使おうと。現在は鍋島時代の小城駅から千葉時代の千葉城のところまで、1本の道を中心市街地活性化事業ということで、国の支援を受けながら、いろいろな取り組みをやっております。

そのようなときに、具体的に各地を見ていくための、一番最後に書いておりますけれども、屋根のない博物館（小城どこでんミュージアム）という、小城市の教育委員会から非常に手ごろなパンフレットが出まして、それを持って小城の市内はどこでも遺跡を見に行くことができるようになっていきます。ぜひ、千葉市、千葉県の方、小城のほうに来られまして見ていただければ、昔の千葉さんの時代の雰囲気が残っておりますので、どうぞいらしてください。以上です。（拍手）

○濱名徳順 そのようなことで、唐梅館絵巻のお話とか、いろいろお聞きしたいこともあったわけですが、時間が来てしまいましたので、この辺でまとめのほうにさせていただきます。

千葉氏が残した文化遺産がこのように県外の各地で非常に大切に継承され、そして地域のアイデンティティーづくりに活用されているということ、きょう各自治体からおいでになっていただいた研究者の先生に発表いただいて、そのような様子を皆さんにご覧になっていただいたというところで、今日のトークセッションをこれで締めさせていただきます。もっとゆっくり時間を頂戴して、また改めて、それぞれの地域をテーマにしながら、こういったパネルディスカッション等をつけてまいりたいと考えております。

では、各先生、どうもありがとうございました。（拍手）

○司会 ありがとうございました。今お話がございましたように、遠方からお越しいただきました皆様方、もっともっと話をしたかったと思われているかと思いますが、申しわけございませんでした。いま一度大きな拍手をお願いいたします。（拍手）

それでは、ステージの皆様、どうぞご降壇くださいますようお願いいたします。

続きまして、私からは次のご案内でございます。10分間休憩とさせていただきます、

10分押しで次のプログラムが始まります。これをもちまして第1回千葉氏サミットの1部は終了となりますが、この後のプログラムは千葉氏首長フォーラムでございます。